

# がん治療の今

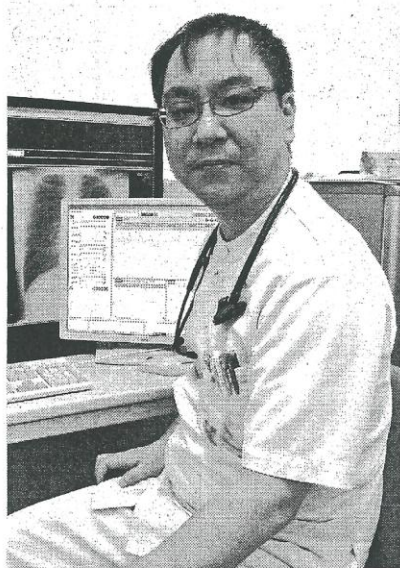
5

## 予防に禁煙有効

1981年(昭和56年)以降、国内の死因のトップは悪性新生物(がん)です。中でも、肺がんは男性で第1位、女性は第2位で、極めて予後が不良ながんの一つです。

肺がんの原因として最も重要なのが喫煙で、予防には禁煙が有効です。

日本人の喫煙者の肺がん発症のリスクは、禁煙者と比べて、男性で4.4倍、女性で2.8倍といわれています。また、近年の大気汚染も、肺がん増加の一因との見方もあります。



たなか・やすまさ  
1998年(平成10年)札幌医大卒。内科学会認定医。札幌医大医学部臨床准教授。42歳。

肺がんは、肺の気管支や肺胞の細胞ががん化して発生し、正常な細胞を浸食しながら進行し、血液やリンパの流れに乗って全身に転移することもあります。

自覚症状や定期健診で異常を指摘され、初診さ

## 肺がん・内科的治療編

# 早期発見へ検診が大切

肺がんは、早期に発見できれば手術が可能となります。最終的にはがん組織

の一部を採取した病理診断(顕微鏡診断)で、確定診断されます。

組織の採取は、気管支カメラを用いて行うことが多いです。製鉄記念室蘭病院では2014年度(平成26年度)から、より診断精度の高い超音波内視鏡を用いています。

この超音波内視鏡では、エコーで確認しながら、がん組織の一部を採取するため、より安全、かつ確実に病理診断を行うことが可能です。

化学療法、いわゆる抗がん剤投与ですが、近年は治療薬や投与方法、副作用対策が徐々に進歩しており、有効性も証明されています。副作用が軽度であれば通院での治療も可能です。がんを縮小でき

ることが大切です。現状では手術以外で肺がんを根治できることはまれで、化学療法や放射線療法では、がんの縮小を目指すか、少なくとも腫瘍の進行を止めるのが治療の方針となります。

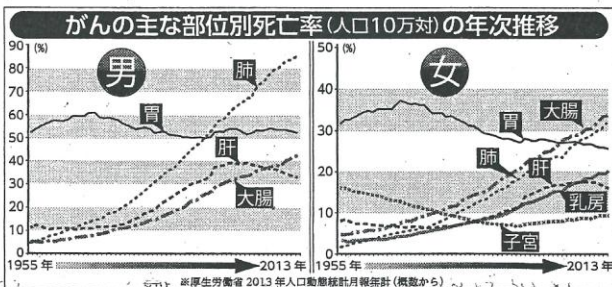
利便性が高まる

化学療法、いわゆる抗がん剤投与ですが、近年は治療薬や投与方法、副作用対策が徐々に進歩しており、有効性も証明されています。副作用が軽度であれば通院での治療も可能です。がんを縮小でき

ることが可能です。現状では手術以外で肺がんを根治できることはまれで、化学療法や放射線療法では、がんの縮小を目指すか、少なくとも腫瘍の進行を止めるのが治療の方針となります。

肺がんの化学療法で近年、分子標的治療が格段に進歩しています。分子標的治療とは、がん細胞にある特有の因子を見つけ、それだけを狙い撃つ治療法です。いわば、正常な細胞にはほとんど影響を与えず、がん細胞だけを選んで壊すため、副作用は比較的少なく、同時に大きな効果も期待できる理想的な治療法です。

ただし、治療に当たっては、がん細胞の遺伝子異常が適合する必要があります。現在では可能な限りの全ての症例で、治療薬が存在する「EGFR遺伝子変異」と、「ALK融合遺伝子」といった二つの遺伝子異常の検索を行っている施設が多い



ない場合でも、最低限がんの進行を抑えて日常生活を継続することを目標としています。

また、化学療法と放射線療法との併用による相乗効果も知られています。放射線療法は、製鉄記念室蘭病院ではこれまで他病院に依頼して進めていたが、今年3月から製鉄記念室蘭病院での対応

期待できる理想的な治療法です。

ただし、治療に当たっては、がん細胞の遺伝子異常が適合する必要があります。現在では可能な限りの全ての症例で、治療薬が存在する「EGFR遺伝子変異」と、「ALK融合遺伝子」といった二つの遺伝子異常の検索を行っている施設が多い

肺がんの発症では、これ以外にも遺伝子変異が関与していることが分かっているが、治療薬は未承認あるいは未開発であり、今後のさらなる発展が期待されています。

なお、製鉄記念室蘭病院がん診療センターでは、5月25日午後3時から「肺がんの内科的治療」をテーマにしたセミナーを開きます。参加無料、予約不要ですので、お気軽にお越しください。

## 製鉄記念室蘭病院・田中康正呼吸器内科長